実践報告

保育者としての実践力を高めるための試み
― 指導案の添削活動を通して―
An Attempt to Enhance Practical Skills as a Childcare Worker
― Through the Activity of Correcting a Teaching Plan ―

中村敏男　　国際学院埼玉短期大学幼児保育学科

保育者としての専門性と実践力を高めるために、様々な科目の授業が展開されている。ただ、それら様々な学びの成果を保育者を目指す自分の力としてまとめ上げるのは、当然ながら学生自身に委ねられているのが現実である。そこで今回、実習をきっかけとして、異なる科目間で連携し、また学年間で学生が学びの交流を進める授業実践を試みた。卒業を控えた 2 年生の保育者としての実践力を高めるのがこの実践の目的である。

1 年生が「保育実習指導Ⅰ」の授業中で作成した部分実習の指導案を、2 年生が「保育・教職実践演習」の授業において、添削指導する活動を取り入れた。2 年生の「保育・教職実践演習」の履修者は 93 名（うち再履修者 5 名、委託訓練生 3 名、科目等履修生 2 名を含む）、1 年生の「保育実習指導Ⅰ」の履修者は 72 名（うち再履修者 3 名、委託訓練生 5 名、科目等履修生なし　を含む）である。

実習園での実習や、大学におけるその前後の学びの中で、何度も指導案を作成した 2 年生にとっても、指導案を添削するという経験は初めてであった。新鮮な感覚で添削作業に取り組む中で、自分自身の実習を振り返ったり、指導案作成に新たな発見をしたりすることができたことが、振り返りレポートの記述から読み取ることができる。また、添削を受けた 1 年生にとっては、目前に控えた保育実習について、2 年生の先輩からアドバイスと励ましをもらう機会となったことが、添削してくれた先輩への感謝のメッセージから読み取れる。

今回の取組を通して、2 年生は実習での学びを振り返るとともに、近い将来、実習生を指導する保育者としての疑似体験することで保育者を目指す意識を高めることができた。また、指導案の添削を受けた 1 年生にとっても、日頃あまり交流のない先輩から目前に迫った保育実習についてアドバイスしてもらうという貴重な経験を通して、実習に向かう意欲を高める機会となった。

キーワード：実践力、科目間の連携、学年間の学びの交流

１．はじめに

1 年生の学生との雑談の中で、指導案作成の難しさが話題になった。例えば「造形表現領域指導法」の授業でいろいろ製作するのは楽しく、得意でも、製作活動を中心とした指導案を書くとなると何をどう書いたらいいのか難しいという。このため、2 月の保育実習が不安だとのことであった。これは決して珍しい状況ではなく、多くの学生が似たような不安を抱えたまま実習に臨むのが現実である。特に 1 年生の実習は、学生がこうした問題を克服し、保育者としての基礎的な実践力を身に付けるのがねらいでもある。しかし、学生の不安を少しでも和らげ、実習への前

向きな姿勢を持たせることが必要である。そこで、従来取り組んでいる「実習報告会」（令和５年度は、令和 5 年 11 月 24 日に実施。10 月に初めての教育実習を経験した 1 年生に対して、2 年生が自分たちの実習経験を伝える活動。2 年生は実習の取組を振り返り、1 年生は今後の実習について様々な情報を得ることになる。）の発展形として、1 年生の作成した指導案を 2 年生が添削する活動を計画した。実習に対する 1 年生の不安解消というのがこの実践のきっかけではあるが、実習を終えた 2 年生の、学びの総括の場の一つとして機能するのではないかと考えた。学年や科目の壁を取り払い、学生の実践力を高めるための試みである。

1 年生が「保育実習指導Ⅰ」の授業で作成した指導案を、2 年生が「保育・教職実践演習」の授業の中で添削する活動に取り組んだ。「保育・教職実践演習」のシラバス上、「部分実習の再検討１・Ⅱ（14 回目と 15 回目の授業）」の中の、15 回目「部分実習の再検討Ⅱ」の内容を一部変更して行ったものである。14 回目「部分実習の振り返りⅠ」では、「読み聞かせ」「ピアノ演奏」「昼食指導」など６つのテーマごとにグループを組み、実習の状況を振り返って再検討する学修を展開した。これまでは 15 回目の授業でグループワークの結果発表を行っていたが、今回は発表部分を圧縮して 14 回目に実施し、15 回目の授業に「指導案の添削」という活動内容を取り入れた。

添削の材料としての指導案は、1 年生が「保育実習指導Ⅰ」の 10～12 回目（12 月中に実施）の授業で作成したものである。この指導案作成については、「保育実習指導Ⅰ」の担当者がシラバスに添って授業の中で指導を行っている。その指導に加えて、今回「2 年生の先輩からも添削指導してもらう」ことにした。1 年生は 10 月に教育実習Ⅰ（幼稚園観察実習）を経験してはいるが、保育実習は後期の授業終了後の 2 月に実施することになっている。2 年生の先輩が添削してくれた指導案を、2 月の「本番」で使用することができるようにするという流れにした。

なお、2 年生の「保育・教職実践演習」と、1 年生の「保育実習指導Ⅰ」は担当教員が異なる。このため 1 年生の授業における指導案作成の状況や、2 年生の授業における指導案添削活動の趣旨などについて、あるいはまたそのための方法や実施時期などについて担当教員間で情報共有するなど、連携を図っての取組となった。

２．取組の内容

2-1　取組の準備

①1 年生が「保育実習指導Ⅰ」の授業で作成した部分実習の指導案を借り受けて、個人名をマスキングしてコピー。

②コピーした指導案に通し番号をつける。借り受けた時点での指導案件数は 55 件。欠席、未提出などにより、1 年生の履修者全員分が揃っていたわけではなかった。

③2 年生の「保育・教職実践演習」15 回目の授業で、「自分の実習の経験を踏まえて 1 年生の作成した指導案を添削しよう」という課題を提示。

④活動の準備として、1 年生の指導案を添削するための留意点について考えさせた。その結果、

・安全面の留意点（ハサミの使い方や、道具類の整理など）
・子どもの発達段階と、活動時間の長さ
・子どもへの言葉がけの工夫
・指導案に書かれる文字の正しさや丁寧さ、分量

・活動のねらいと、具体的な活動との整合性

などのポイントが指摘された。ここには自分自身の実習中の経験が反映されているようだ。

2-2　添削活動

①指導案のコピーを配付。指導案コピーの件数が、2 年生の人数よりも少ないため、2 枚にわたる分量の指導案は 2 名で担当することとした。また、添削指導する責任上、添削を担当した自分の名前を明記するよう指示。（1 年生の名前はマスキングして配付したが、添削する 2 年生として自分の名前を明記することに抵抗感を示す学生は見られず、後輩のためにしっかりした添削をしなければ･･･といった緊張感が感じられた。）

②（「2-1　④」でまとめた留意点に加えて）授業者から「一つリクエスト」として、指導案の中で（2 年生の目から見て未熟なものであっても）よい部分を探し、褒めてあげることで、1 年生のモチベーションを高めてほしいと伝えた。実習中に褒められて嬉しかった経験を思い出した学生が多く、大いに共感を得るポイントとなった。

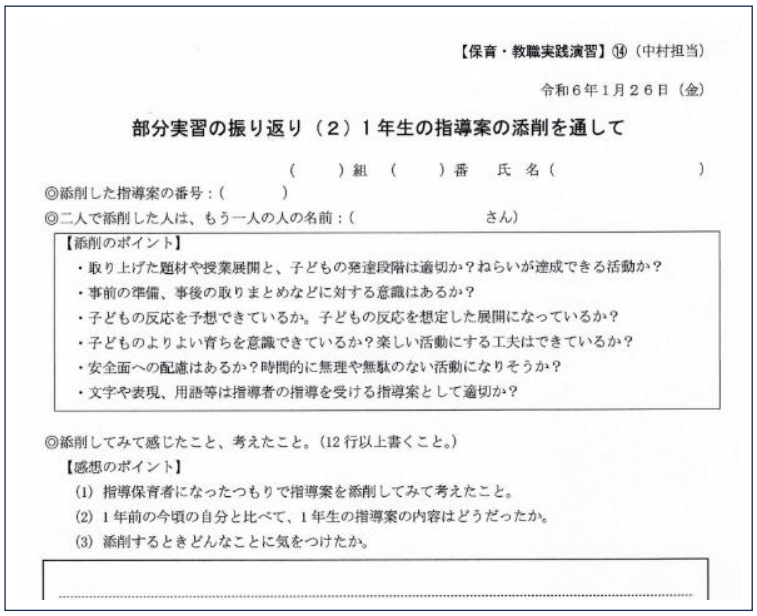
③添削活動開始。（50 分間程度）

④周囲の学生と添削した指導案の情報交換。添削結果の発表。（10 分程度）

⑤小レポートとして、「学修資料⑭」（図 1 参照）を配付。その中に、添削時の留意点も整理してまとめておいた。ただし、そのうちの大部分は、上記「2-1　④」に記した、学生の発表内容と重なるものとなった。実際に 1 年生の指導案を添削してみて気づいたことを中心に小レポート作成、提出。（15 分間程度）

３．取組の結果

3-1　学修資料、添削した指導案、添削活動後の小レポートの実際



【保育・教職実践演習】⑭（中村担当）

令和６年１月２６日（金）

部分実習の振り返り（２）１年生の指導案の添削を通して

（　　）組（　　）番　氏 名（　　）

◎添削した指導案の番号：（　　）

◎二人で添削した人は、もう一人の人の名前：（　　さん）

【添削のポイント】

・取り上げた題材や授業展開と、子どもの発達段階は適切か？ねらいが達成できる活動か？
・事前の準備、事後の取りまとめなどに対する意識はあるか？
・子どもの反応を予想できているか。子どもの反応を想定した展開になっているか？
・子どものよりよい育ちを意識できているか？楽しい活動にする工夫はできているか？
・安全面への配慮はあるか？時間的に無理や無駄のない活動になりそうか？
・文字や表現、用語等は指導者の指導を受ける指導案として適切か？

◎添削してみて感じたこと、考えたこと。（12 行以上書くこと。）

【感想のポイント】

(1) 指導保育者になったつもりで指導案を添削してみて考えたこと。
(2) 1 年前の今頃の自分と比べて、1 年生の指導案の内容はどうだったか。
(3) 添削するときどんなことに気をつけたか。

図１　学修資料⑭の部分（小レポート部分省略）

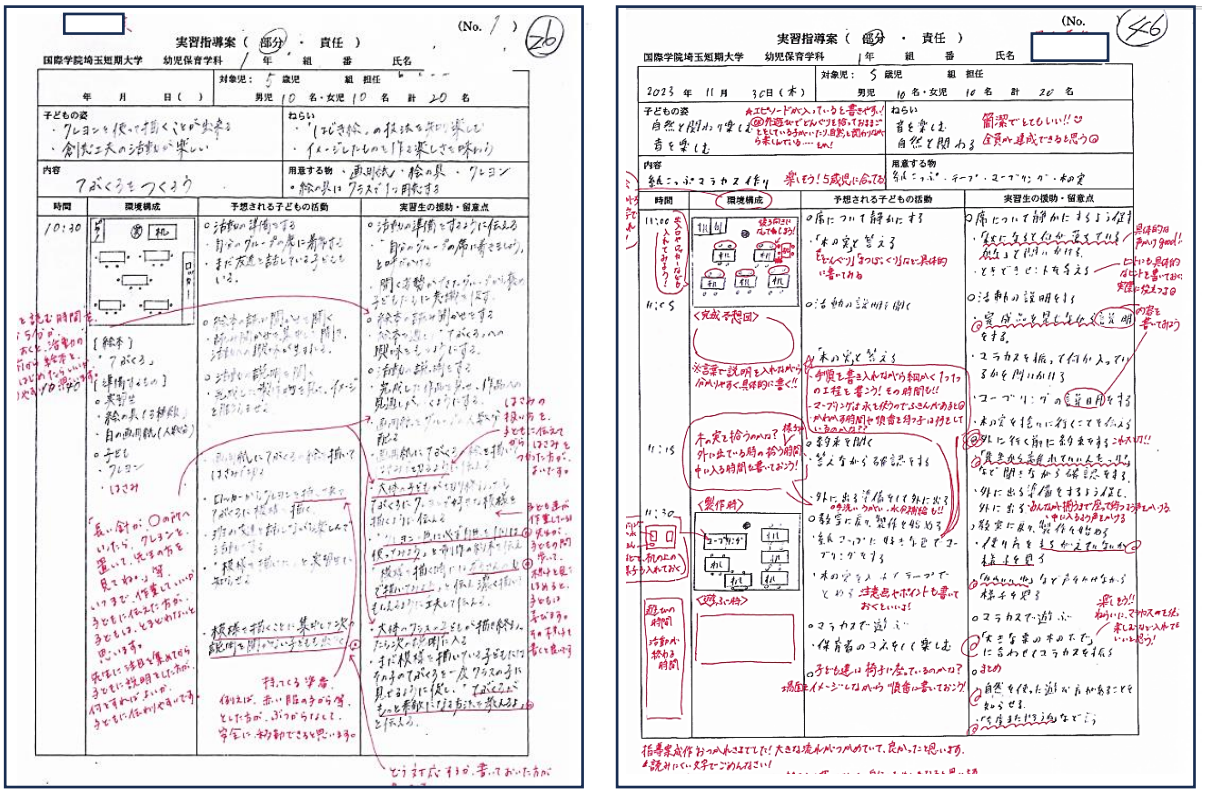
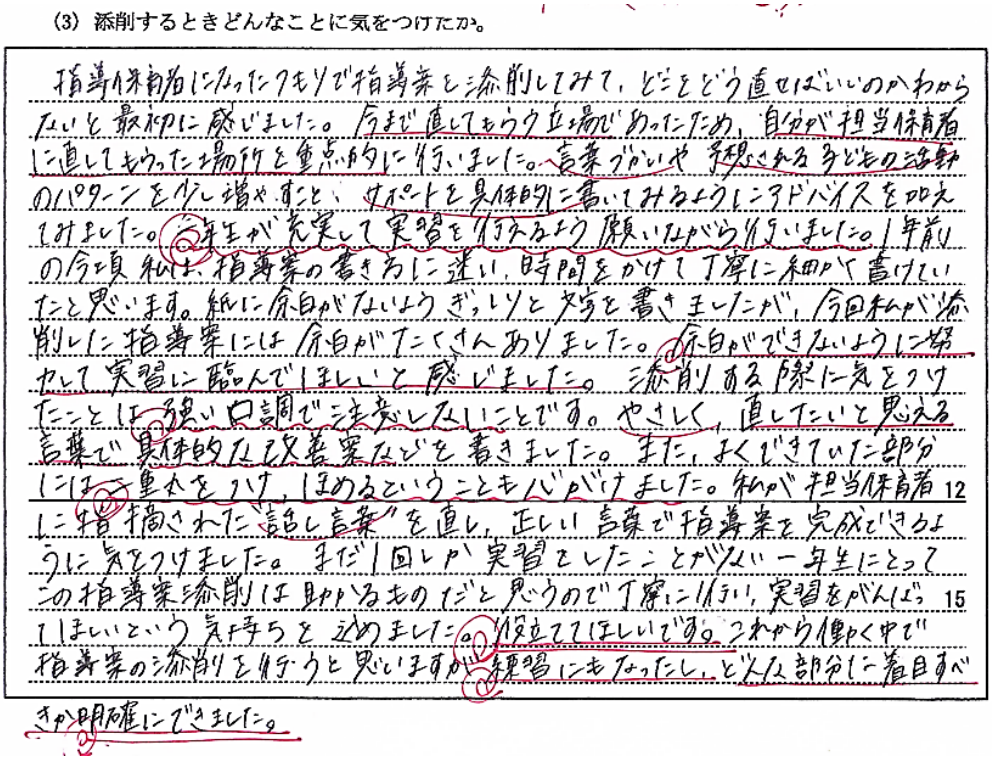


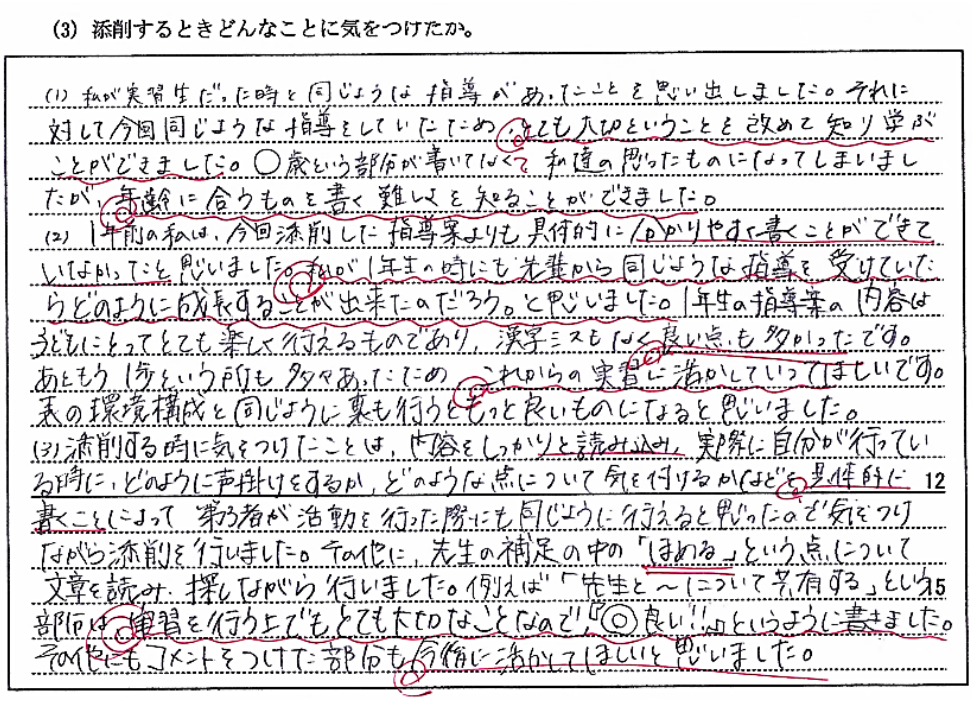
図 2　添削した指導案の実際（添削した学生の名前は修正）



(3) 添削するときどんなことに気をつけたか。

指導保育者になったつもりで指導案を添削してみて、どこをどう直せばいいのかわからないと最初に感じました。今まで直してもらう立場であったため、自分が担当保育者に直してもらった場所を重点的に行いました。言葉づかいや予想される子どもの活動のパターンを少し増やすと、サポートを具体的に書いてみるようにアドバイスを加えてみました。一年生が充実して実習を行えるよう願いながら行いました。1年前の今頃私は、指導案の書き方に迷い、時間をかけて丁寧に細かく書けていたと思います。紙に余白がないようぎっしりと文字を書きましたが、今回私が添削した指導案には余白がたくさんありました。余白ができないように努めて実習に臨んでほしいと感じました。添削する際に気をつけたことは強い口調で注意しないことです。やさしく、直したいと思える言葉で具体的な改善案などを書きました。また、よくできていた部分には重点をつけ、ほめるということも心がけました。私が担当保育者に指摘された"詰め言葉"を直し、正しい言葉で指導案を完成できるように気をつけました。まだ1回しか実習をしたことがない一年生にとってこの指導案添削は助かるものだと思うので丁寧に行い、実習をがんばってほしいという気持ちを込めました。役立ててほしいです。これから働くなかで指導案の添削を行うと思いますが、練習にもなったし、どんな部分に着目すべきか明確にできました。

図 3-1　添削活動後の小レポート（その 1）



(3) 添削するときどんなことに気をつけたか。

(1) 私が実習生だった時と同じような指導があったことを思い出しました。それに対して今回同じような指導をしていたため、とても大切ということを改めて知り学ぶことができました。○歳という部位が書いてなくて和道の問ったものになってしまいましたが、年齢に合うものを書く難しさを知ることができました。

(2) 1年前の私は、今回添削した指導案よりも具体的に分かりやすく書くことができていなかったと思いました。私が1年生の時にも先輩から同じような指導を受けていたらどのように成長することが出来たのだろう。と思いました。1年生の指導案の内容はこどもにとってとても楽しく行えるものであり、漢字ミスも少く良い点も多かったです。あともう1歩という所も多々あったため、これからの実習に活かしていってほしいです。表の環境構成と同じように裏も行うともっと良いものになると思いました。

(3) 添削する時に気をつけたことは、内容をしっかりと読み込み、実際に自分が行っている時に、どのように声掛けをするか、どのような点について気を付けるかなどを具体的に書くことによって学び者が活動を行った際にも同じように行えると思ったので気をつけながら添削を行いました。その他に、先生の補足の中の「ほめる」という点について文章を読み探しながら行いました。例えば「先生と～について共有する」という部位は実習を行う上でもとても大切なことなので『◎良い!!』というように書きました。その他にもコメントをつけた部位も今後に活かしてほしいと思いました。

図 3-2　添削活動後の小レポート（その 2）

3－2　指導案の添削を受けた 1 年生の反応

授業日程の関係で、添削された指導案を 1 年生に返却できたのは、後期の授業が終わった後になってしまった。「保育実習指導Ⅰ」の授業担当者と連携して、2 年生の「保育・教職実践演習」の授業の中で、2 年生が指導案を添削したこと、1 年生 2 年生それぞれにとっての意味などを説明した資料（図 4 参照）とともに、個別に返却した。資料の最後に、以下のような形で添削してくれた 2 年生の先輩へのお礼の気持ちを伝えるよう促した。

★後期試験、実習準備･･･と慌ただしい中ですが、先輩への感謝のメッセージを伝えることをお勧めします。添削してくれた先輩の名前と、自分の指導案番号を書いたうえで、先輩への感謝のメッセージを中村宛チャットで送信してください。中村から 2 年生の先輩に転送します。（あなたの名前を書くかどうかは、あなたの判断に任せます。書きたくない場合はその旨メモしてください。指導案番号のみで、先輩に届けます。）忙しい中ですから、必ずというわけにはいきません。あくまでも任意とします。また、長文の＜作文＞である必要は全くありません。ほんの一言でも、感謝の気持ち、実習に向かう決意の気持ちを込めたメッセージが書けることは、保育者を目指す学生に必要な資質です。添削された中のどこに注目したか、どんな思いで実習に向かうか、そのようなメッセージが、皆さんの指導案を添削してくれた先輩への感謝に繋がります。

図 4　添削後の指導案返却にあたり、1 年生に配付した説明資料（一部省略）

後期試験や、実習の準備と重なってしまい、件数は期待したほど多くはなかったが、先輩への感謝のメッセージが 2 クラス合計 12 件送信されてきた。それらの中から 3 件取り上げ例示する。これらを含め、送信されたメッセージを全て、添削を担当した 2 年生に転送した。

・〇〇先輩と●●先輩　1A の◆◆です。この度は、指導案を添削してくださりありがとうございました。良いところもご指摘くださったり、応援をしてくださったり、大変励みになりました。また、予想される子どもの活動の部分は、いざと言う時に自分がどのように対応できるかを考える上で、大変重要であると感じました。先輩方のアドバイスをしっかり受け止め、指導案を作成し、今後の実習にいかしたいと思います。本当にありがとうございました。

・〇〇先輩　15 番の指導案を添削して頂いた◇◇と申します。添削して頂きありがとうございます。ハサミを使う際は、左利きの子がいるかを事前に把握していなければいけないということに気づくことができました。特に実習生の援助・留意点のアドバイスは大変勉強になりました。今回添削して頂いたことを実習の指導案に活かしたいと思います！ありがとうございました！

・〇〇先輩　指導案番号 49 番の□□です。簡潔に的確にご指導くださりありがとうございます！先輩に添削して頂いて、良い点と改善点が明確になりました。指導案の書き方が分からなかったけれど、先輩のアドバイスが分かりやすいので、保育実習や施設実習の部分実習の指導案作成に活かしていきます。お忙しい中、丁寧に添削して下さり本当にありがとうございました！

なお、実際のメッセージのやりとりは、チームズのチャット機能を使って行った。以下に示すのは、実際のチャット画面の状況である。

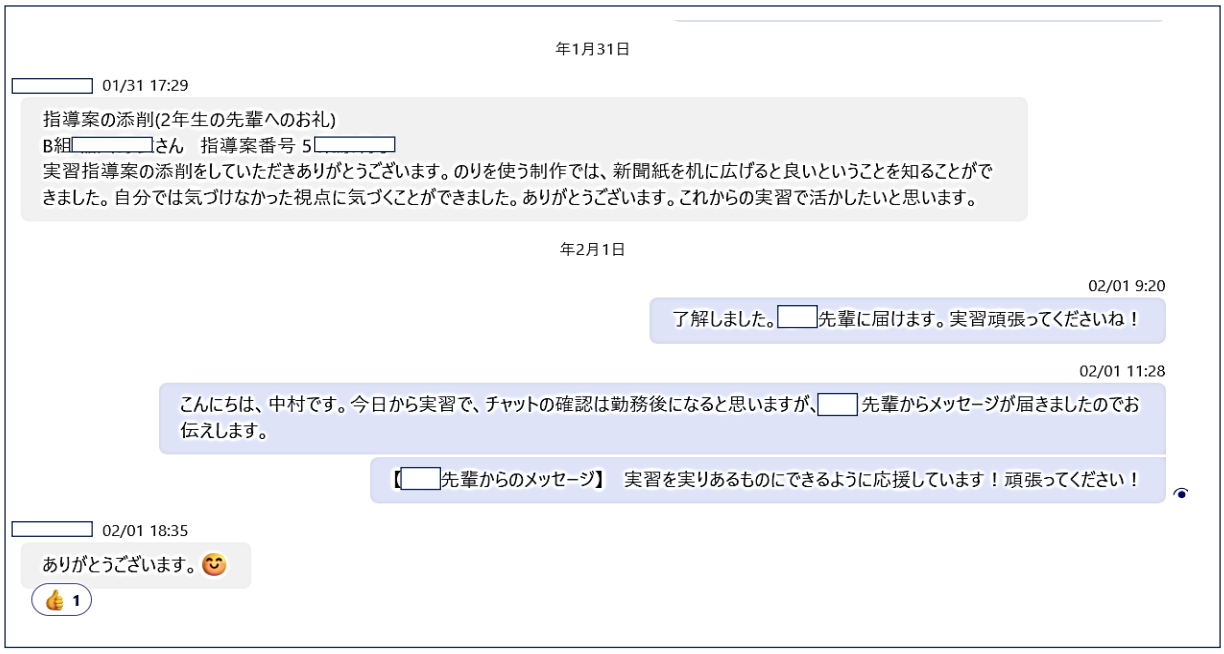


図 5　チャットを活用した感想メッセージのやりとりの実際（個人名は修正してある）

また、中には 1 年生からの感謝のメッセージに次のような返事を送信してきた 2 年生もいた。

・自分が実習で教えてもらったことを意識して添削して、それを参考にして貰えて良かったです。「一年生はこれから保育実習と施設実習が始まると思うので、いろいろな人の意見などを取り入れて指導案を書いてもらえたらと思います。体調管理をしっかりして長いようであっという間の実習を充実させられるように頑張ってください。」と 44 番の一年生にお伝えください

4．考察

4-1　振り返りレポートの記述から

2 年生は、ここまでの実習経験、またその前後の指導の中で何度も指導案作成の経験を重ねてきた。それは保育者を目指す学生にとって、専門性と実践力を高めるために重要な学びの一つである。そんな学生たちにとっても、「指導案を添削する」という経験は初めてだった。振り返りの小レポートの中で、そのことに触れて感想をまとめている学生も少なくなかった。学生のコメントを何点か示す。

・指導案を初めて添削してみて、その大変さを知った。指導案作成は何度もして、その大変さは経験済みだったが、保育者になって実習生を指導するとき、今回の経験を思い出すかもしれない。
・実習中は、とにかく時間内に書き終わらせるのが精一杯で、指導する側の保育者が、指導案の添削に、こんなに大変な思いをしていることなど、考える余裕はありませんでした。
・添削を始める前に、「添削するとき大切だと思うこと」について考え、発表し合いました。あのとき私は、自分で考えたことと言うより、実際に実習先で体験したことをそのまま発表しました。それは活動の時間配分のことでした。頭の中で考えただけの指導案で、実際の子どもの姿を思い浮かべることなどできていなくて、その点を担当の先生から指摘されたことを思い出したからです。
・授業中、添削を始める前に、先生が「いいところを見つけて、褒めてあげるのをお忘れなく！」と強調していたのが印象的だった。なぜなら、私も実習中、指導案作成で苦しんでいたとき、担当保育者から自分で気づいていなかった「よさ」（ほんの小さなことだったが）を褒めてもらい、なんだか救われたような気分になったからだ。こういう経験をした人はたくさんいるのではないか。1 年生にも、そのことを知ってもらおうと思った。
・1 年前の私は、今回添削した指導案よりも、具体的にわかりやすく書くことができていなかったと思いました。私が 1 年の時にも、先輩から同じような指導を受けていたら、どのように成長することができただろうと思いました。（図 3-2 参照　アンダーラインは筆者による）
・去年の今頃の自分と比べると、今年の 1 年生は指導案作成に慣れているのではないかと思った。少なくとも去年の私は、今回添削した指導案ほど細かく書けていなかったような気がする。私が実習中に初めて指導されたことが、もう既に指導案に書けている部分があって驚いた。

・今回初めて指導案の添削をしてみて、なんだかチョット優越感のようなものを感じることができた。「ああ、そうそう、私も去年の今頃はこうだった･･･」などと感じる部分が結構あって、後輩の指導案を添削するというより、これまでの自分を思い出す方が多かったような気がする。そんなわけで、最後の部分に心を込めて「実習、大変だけど頑張ってね！」というメッセージを書き加えてみた。

指導案の添削活動そのものは、ほんの 1 時間弱の活動ではあったが、振り返りの小レポートの記述から、今回の取組が保育者としての専門性を高め実践力を身につける基盤となり得るものであることが示唆された。「私が 1 年の時にも、先輩から同じような指導を受けていたら、どのように成長することができただろう」というような記述は、今回の取組のねらいの一つをみごとに言い当てているものと考えられる。これまでの実習やその前後の実習指導の中で、ややもすると「作成するのが大変…」「避けることのできないもの…」という、どちらかと言えば否定的なニュアンスで受け止められている指導案作成。「作らされている」というだけの受け止め方から、それを指導する側の経験をしたことで、指導案作成そのものにも新たな視線を向けることができたようだ。さらに、実習生の指導をする保育者の仕事に目を向けた学生もいるようだ。。

また、これも授業のねらいの一つではあるが、目の前の後輩の指導案を通して、これまで自分自身が実習中に受けてきた指導案作成のポイントについても振り返り、整理する機会となった。自分自身が作成した指導案を見直していただけでは、ここまで客観的で冷静な振り返りはもしかしたら難しかったかもしれない。第三者の立場で見るという状況に加えて、「先輩」としてのプライドが、指導案作成のポイントを整理するうえで効果的に機能していたと言えるようだ。

4-2　添削を受けた 1 年生の反応について

3－2 で記述したように、添削を受けた 1 年生の中の何名かが、添削してくれた先輩に感謝のメッセージを送った。その内容は、「言われたから書いた」というものではなく、先輩が実際に自分の指導案を添削してくれたという驚きや、実習への不安に裏打ちされた真実味のある内容だったと言える。ある 1 年生は、保育実習が終わり、施設実習の前に次のようなメッセージを送ってきた。

・お忙しい中実習指導案をご覧いただきまして、誠にありがとうございました。先輩のアドバイスを次の実習にも活かしていきたいと思います。

このメッセージを、次のように補足して、添削した 2 年生に転送した。

・〇〇さんこんばんは、中村です。夜分失礼します。「保育・教職実践演習」の最後に、1 年生の指導案の添削をしましたが、〇〇さんが添削した 24 番の 1 年生（1 A□□さん）から以下のお礼のメッセージが届きました。保育実習で先輩のアドバイスが活かされ、施設実習に向かう前に先輩にお礼を伝えたいと思ったようです。

これに対して、添削した 2 年生からは、「確認しました。ありがとうございます！」というメッセージが返信された。1 年生のメッセージには、添削の中にあった先輩からのアドバイスが保育

実習の中で参考になったことのお礼と、この後の施設実習への決意を読み取ることができる。保育実習が始まる前にお礼・感謝のメッセージを送ることができなかったものの、いざ実習をしてみると先輩がアドバイスしてくれた通りだったという驚きの気持ちや感謝の気持ちが読み取れる内容であった。そこで、このメッセージを 2 年生に転送する際、そのあたりのニュアンスも補足してみた。

筆者が担当している 1 年生の別の授業の中でも、「今、2 年生の授業の中で、先輩がみんなの書いた指導案を見てくれている」と期待感をあおる働きかけをした。前述したとおり、1 年生の手にそれが戻ったのは実習直前となってしまったが、そのことが逆に先輩への感謝の気持ちを強めたという側面もあるかもしれない。また、「今年の 1 年生はスゴイ！」という感想が多く寄せられたことは、「保育実習指導Ⅰ」の授業者にも伝え、間接的に 1 年生にも伝わるようにし、また筆者の 1 年生の授業でも、それを伝えることにした。厳密に言えば、「去年の 1 年生（つまり、今回添削指導をした 2 年生）の昨年の状況」についての客観的なデータがあるわけではなく、あくまでも今回の取組を通した 2 年生の感覚的な思いに過ぎない。しかしそれでも「今年の 1 年生はスゴイ！」という 2 年生の感想が、1 年生の耳に届くようにすることは、1 年生の学びにプラスの影響をもたらすものと考える。少数ではあったが、感謝のメッセージを送信した 1 年生の動きはそれを象徴しているものと思われる。

次年度、現 1 年生が 2 年生で同じ取組をするとき、1 年前の先輩の指導を思い出ししっかり取り組んでくれるのではないだろうか。そして、1 年生からの感謝のメッセージの数もさらに増えるのではないかと期待するところである。学年を超えた学生同士の学びの交流、さらには年度をまたいだ学びの連鎖が強まり、ひいては学生生活全体の充実のための新たなきっかけとなるかもしれない。1 年生と 2 年生が、指導案という題材を介して互いに学びの関わり合いを強めることは、保育者としての実践力を身につけるための具体的な手立ての一つになるはずである。

５．おわりに

1 年生との雑談の中で、指導案作成の難しさについてのぼやきを耳にしたのが、今回の取組のきっかけであった。授業を展開する立場にある者として、「専門性の高い保育者を養成する」「実践力のある保育者を育てる」というイメージだけは持っていたものの、それを日々の授業実践になかなか落とし込めていない現状があった。1 年生のぼやきを聞いても、「そんなこと言わずに、頑張れよ･･･」などと、具体性のない単なる励ましかできていなかった。しかし、たまたまのきっかけにより、シラバスの内容を大幅に変更することもなく、「1 年生の作成した指導案を、2 年生が添削する」という活動を試みることができた。

今回の試みが意味を持つのではないかと思われる背景の一つに、短期大学で学ぶ学生たちの学生生活全体の特質もある。2 年間の過密スケジュールの中で学生生活を送る学生たちは、高校生までのような、部活動や生徒会活動などの「異学年交流」の場は限定されている。体育大会、五峯祭（本学の学園祭）はあるし、少数ながらサークル活動に打ち込む学生もいる。しかし、それ以外の「異学年交流」の場は少ない。こうした学生生活の状況を考えると、学生生活の中心である授業の中で、異学年間で「指導案の添削」や、その後のメッセージのやりとりの場を設定することの意味は大きいのではないだろうか。

実習を経験してきた 2 年生だからこそ、その経験を活かして後輩の作成した指導案を添削する

ことができた。もちろんこれまでも、2 年生は自分の実習から多くの事を学び、自分の力を高めてきたことになる。しかし今回の取組を通して、後輩の実習に役立つアドバイスをする機会を持つことができた。また同時にその活動の中で自分の実習の学びを整理、確認することもできたわけである。先輩としてのプライドが良い意味で刺激された結果かも知れない。1 年生も、先輩からのアドバイスを実習の中で確かめ、活かす経験をすることで、先輩のアドバイスの実質的な意味やその効果を確認することができたのではないだろうか。

2 年生にも 1 年生にも意義のある、言わば「Win-Win」の結果に繋がる試みとするために、今後検討すべき内容も少なくない。まずは実施時期の問題。後期の最終場面での取組となったため、特に 1 年生が先輩のアドバイスを、授業の中で十分に咀嚼する時間が取れなかった。難しい理屈が前面に出るのではなく、経験した先輩から後輩へのアドバイスであったことが、時間のなさによる問題を多少和らげてはくれた。しかし、1 年生の授業の中で、先輩のアドバイスの意味を十分理解させる時間を確保することによって、この取組の意義はさらに高まるのではないかと考える。

また、科目間の連携という問題にも目を向けなければならない。科目間の連携に関する現状や、問題点、また連携の実践的な研究はかなり以前から取り上げられている[1) 2)]。本学においても、その科目で何を指導しているかということについてあまり情報の交流がなく、同じことをいくつもの科目の中で扱っているという問題は、これまでにも課題となっていることである。今回の取組は、こうした状況も含めて、科目間の連携の必要性について考えるきっかけとなった。一つの科目で指導していることを、別の科目の中で発展的に扱うことで、結果として保育者を目指す学生の専門性、実践力は高まるのではないだろうか。今回は、たまたま 1 年生の保育実習指導の授業における指導案作成と、実習を総括する 2 年生の授業との関わりについて取り上げ、2 年生の授業の中に「学んだことを活かす場面」を設定してみた。その結果として、学年の壁を超えて学生の学びの深まりに繋げることができるのではないかという見通しを持つことができた。科目間連携という大きな課題を意識した割には、極めて小さな取組ではあるが、保育者を目指す学生の実践力を高めるためのきっかけになればいいと考える。別の科目の別の題材について、2 年間の学び全体の中を精査することで、新たな学びの場面を見出すことができるのではないかと考える。指導の重なりを防ぐという視点と併せて、学びの深化のための連携という視点からも今後さらに見直し、できることから始めるといった姿勢で取り組んでいきたい。

また、科目間の連携ということについては、さらに細かな配慮も必要である。今回の取組では、1 年生の「保育実習指導Ⅰ」の中で、指導案作成や、学生が作成した指導案に対する授業者としての評価に関して、後付けで情報を入手することになってしまった。この点について、事前にもっと丁寧な情報共有が必要であった。2 年生の添削指導の方法や内容が、1 年生の授業者の指導方針や内容とかみ合わない状況が生まれると、結果として 1 年生の学びに重大な悪影響が出てしまうことになる。幸い、2 年生が行った添削指導の内容と、「保育実習指導Ⅰ」の授業者が行った指導とは内容的にバッティングすることはなかった。しかし、今後はもっときめ細かな情報共有のための科目間の連携について、検討しなければならない。そして単に指導の齟齬を避けるのではなく、指導の相乗効果が生まれるような工夫・研究が必要になってくる。

保育者としての実践力は、実践的な学びの場の中でこそよりよく養われるはずである。実習という既存の学びの場が、学生にとってより充実したものになるよう、今後もその前後の指導に力

を入れるとともに、学年の学びに注目しつつ学年間の学びの交流にも目を向けて、新たな学びの場の開拓にも力を入れていきたい。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

参考文献

1) 浅井宏・髙橋洋行・鈴木彬子・三浦累美・市河勉・山本斉・景浦紀子・舛森保子：保育内容の指導法、教育課程、教育の方法及び技術に関わる科目の関連性に関する一考察　―関連科目間の連携と実践に基づいて―. MATSUYAMA SHINONOME JR.COL Vol.48,2017:56-73.
2) 波多野和彦・中村佐里・三尾忠男：教科教育法と教育方法の連携にかかわる一考察.日本教育工学会研究報告集　2023 巻 4 号:115-118.